

# 分析的トミズムのエッセ批判について

上 枝 美 典

以下の小論を、一つの疑問文から始めたい。現在、トマス・アクィナスの形而上学を研究することにどれほどの哲学的意義があるのだろうか。この問いに答えるための一つの典型的なケースとして、彼の「エッセの思想」に対する分析的トミストたちの批判を取り上げてみたい。

## 第一章 批 判

まず、トマス・アクィナスのエッセの思想がどのように批判されているかを、具体的に確認しておこう。

本質と存在の実在的区別、そして、神は自存する存在であるという説は、しばしば、アクィナスによって哲学にもたらされた最も深遠で独創的な貢献として紹介される。しかし、この最後の数頁の議論が正しいならば、この説をもっとも好意的に扱ったとしても、それが詭弁であり幻想であるという告発を完全に退けることはできない。(Anthony Kenny)<sup>1)</sup>

トマス・アクィナスの見解によれば、神は、自存する存在そのものである。彼はこれによって何を意味しうるだろうか。(中略) もちろん、われわれは、神が存在そのものであるという教説を理解することはできない。神の何であるかは、神の数がゼロでない、と言うことによって示されるなどということ、とうていあり得ないからである。(C.J.F. Williams)<sup>2)</sup>

エッセの思想に対してこのような批判を投げかけるのは、主として、「分析的トミスト」と呼ばれる人々である。彼らの批判の背景にあるのは、「存在」に関する現代の知見、特に、一階述語論理 (first order predicate logic) の存在量化 (existential quantification) の考えである。したがって、議論を進めるためには、彼らが依拠する一階述語論理における「存在」についての簡略な説明が必要であろう。

命題論理 (propositional logic) が「ソクラテスは人間である」というような命題 (文) 全体をひとまとまりに扱うのに対し、述語論理 (predicate logic) は命題の内部構造を、個体定項 (individual constant) と述語記号 (predicate symbol) に分析する。たとえば、「ソクラテス」という名で呼ばれる個人を指す記号を  $a$ 、「 $\sim$ は人間である」を指す記号を  $H$  とするならば、 $Ha$  という記号は、「ソクラテスは人間である」という文を意味する。このとき、ソクラテスという個人、および「 $\sim$ は人間である」は、それぞれ、個体定項  $a$  と述語記号  $H$  の値 (value) である、と言う<sup>3)</sup>。

個体定項と述語記号に加えて、述語論理では、個体変項 (individual variable) というものを導入する。それは、 $x$  や  $y$  などのアルファベットの後の方の小文字で表され、ちょうど数学の方程式で用いる変数のようなものとして働く。つまり、そこには、ソクラテスやプラトンのような特定の個体だけでなく、そのような特定をすることなく、任意の個体を代入することができる。

この個体変項の導入に伴って、述語論理では重要な記号が導入される。それが、量子子 (quantifier) である。量子子には  $\forall$  と  $\exists$  とがあり、 $\forall$  を全称量子子 (universal quantifier)、 $\exists$  を存在量子子 (existential quantifier) と言う。一階述語論理で言う「存在」は、基本的に、この存在量子子の「存在」である。全称量子子が「すべての」を意味するのに対し、存在量子子は「少なくとも一つの」を意味する。たとえば  $\forall x Hx$  は、「すべてのものは人間である」を意味し、 $\exists x Hx$  は「少なくとも一つのものは人間である」を意味する。そしてこれが、「人間が存在する」と同義であるとされる。

さらに、「すべての」とか「少なくとも一つの」という概念をより正確にす

るために、議論領域 (domain of discourse) というものを設定する。これは個体変項に代入可能なものの集合であり、これによって議論の対象となるものの範囲をあらかじめ定める。「すべての」とか「少なくとも一つの」ということは、その範囲内でのみ論じられる。

以上のことを踏まえると、一階述語論理における「存在」の意味は次のように説明できる。すなわち、「あるものが存在する」ということは、「ある議論領域の中の、少なくとも一つの個体が、ある論理式の個体変項の値となる」ということである<sup>4)</sup>。

さて、本論の議論にとって重要なのは次の点である。すなわち、このように解される限り、一階述語論理における「存在」は、述語記号によって表されるものではない。つまり、 $Fx$  という論理式において、この  $F$  が、「 $\sim$ が存在する」という意味を担うことはありえない。述語記号によって表されるものは、「 $\sim$ は人間である」とか「 $\sim$ は生物である」というように、ある個体の何らかの属性を表しうるものである。これに対して、「 $\sim$ は存在する」「 $\sim$ がいる」という表現は、そうではなく、議論領域、存在量子化、個体変項という、複数の論理的概念によって構成される、複合的な論理概念であり、個体に属する単純な性質について語るものではない。分析的トミストが、よく、「存在は(一階の)述語でない」とか「存在は属性でない」という表現を用いるのは、このような文脈においてである。

「 $\sim$ が存在する」が、「議論領域に属する少なくとも一つの個体が $\sim$ である」という複雑な概念の簡易表現に過ぎないとすれば、たしかに「神は存在そのものである」というような表現は理解困難となろう。したがって、もしも一階述語論理によって「存在」の意味がすべて解き明かされたのであれば、トマス・アクィナスの思想は、その中核において理解不可能なものを含んでいることになる。

## 第二章 弁護 P. Geach の場合

さて、私が本論で考えたいのは、このような批判に対してトマス研究者はど

のような態度をとればよいかということである。もちろん、分析的手法や分析的観点そのものを否定することによって、このような批判から目を逸らしてしまうのも一つのやり方ではある。しかし、私がここで試みたいのは、これらの批判の内部に踏み込み、その観点から考えてみた上で、トマスのエッセを弁護できる道はないか、ということである。

そのように考えてみると、エッセを弁護する方法は、大きく分けて二つあるように思われる。一つは、「存在」に複数の意味ないし用法があることを認め、上述のような、一階述語論理によって処理される「存在」とは別に、述語記号によって処理されるべき述語としての「存在」の用法を主張することである。有名なところでは、Peter Geach の提案がこれに当たる。

もう一つの方法は、「存在」を述語と解釈することを放棄し、その上で、トマス・アクィナスのエッセの思想を弁護する方策である。後に見る、Brian Davies の解釈は、こちらに相当するであろう。

まず、Geach の議論を確認しておこう<sup>5)</sup>。彼は、三種類の存在命題を区別する。

- A ケルベロスが存在しない。
- B 龍は存在しない。
- C ヨセフもいない、シメオンもいない。

まず、A について、Geach によれば、これは「ケルベロス」という名前の用法について語る文である。「ケルベロス」は、神話に登場する架空の怪物の名前である。それが「存在しない」と言うとき、その命題は、たとえば、隣家の飼犬ポチが持っている、ケルベロスが欠いている、何らかの属性について述べているのではない。命題Aを実際に語る状況とは、たとえば、母親からヘラクレスのお話を聞いて恐ろしい怪物のイメージにおびえる子供に、「ケルベロスはいないんですよ」と母親が言って慰める、という状況があるだろう。この時、母親が言っているのは、「あれは嘘なのだ」ということ、つまり、「ケルベロス」という言葉を、あたかも実在するものの名前のように言ったけれども、

本当はそうでないのだ、ということである。従って、命題Aは、ケルベロスという個体について語る文ではなく、「ケルベロス」という言葉の用法についての文だと解釈できる。

命題Bも、命題Aと同じく、「馬」には属していて、「龍」には属していない、何らかの性質についての命題ではない。しかし、命題Aと異なるのは、ケルベロスが（偽）固有名だったのに対し、「龍」は（偽）種の名前だという点である。したがって、命題Bは、「龍」という言葉の用法について、何かを述べているのではなく、「龍」という（偽）種に属する動物がこの世界には一つもないことを言っている。Fregeの言い方を借りるならば、「龍」は、概念語（Begriffswort）であり、命題Bの意味するところは、「龍」という概念のもとに何も属さない、ということである。これは、存在量化によって表現される、通常の一階述語論理の文である。

要約すれば、命題Aは、固有名に関する存在命題、命題Bは、Fregeの言う概念語に関する存在命題である。そして、このどちらも、もとの命題において、あたかも述語であるかのように用いられていた「存在しない」は、真正の述語ではない。前者の場合は、名詞の用法に関する内容であり、後者は、一階述語論理の存在量化である。

さて、重要なのは、命題Cである。Geachによれば、このタイプの存在命題こそ、「いない（存在しない）」が、述語として用いられる例であり、更に彼は、トマス・アクィナスのエッセの思想が整合的な内容を持ちうるのは、この意味での「存在」でしかあり得ない、と言う<sup>9)</sup>。

まず、「ヨセフもいない、シメオンもいない」とヤコブが言うとき<sup>7)</sup>、彼は、名前の用法について述べているのではない。したがって、これは、命題Aに属するタイプではない。更に、「ヨセフ」「シメオン」は、それぞれある特定の人物を指す固有名詞なので、述語として用いられる概念語でもない。したがって、命題Bのタイプでもない。それゆえ、Geachは、この用例こそ、「存在」が、一階述語論理における述語として用いられる例である、とする。ヤコブは、このように言うことによって、ヨセフとシメオンという二人の息子に関する事

実、つまり、彼らが、もうこの世にいないこと、彼らが死んでしまったという事実を述べているのである。

既に述べたように、Geach の解釈によれば、トマス・アクィナスのエッセの思想が少なくとも理解可能となるのは、この場合に限る。逆に言うならば、もしも、彼が命題 C で言おうとしているような、一階述語論理における述語としての「存在する」を認めることができなければ、トマス・アクィナスのエッセの思想は、理解不可能だということになる。つまり、彼の立場は、次の論証の 1 を認め、2 を否定するものだと言える。

1. 「存在」が、決して述語でないならば、トマス・アクィナスのエッセの思想は理解不可能である。
2. 「存在」は、決して述語でない。
3. ゆえに、トマス・アクィナスのエッセの思想は理解不可能である。

さて、この Geach の「弁護」が成功しているかどうかについて、ここで判定を下すのは困難である。なぜなら、それは、「存在する」に、一階述語論理における述語としての用法があるかどうか、という、かなり大がかりな問題に取り組む必要があるからである。ちなみに、この課題に正面から取り組んだのが、冒頭に引用した C. J. F. Williams である。彼は、その主著、*What is Existence?*<sup>28)</sup>において、いかなる文脈においても、「存在する」が、決して一階述語論理における述語でないこと、つまり、いかなる述語記号の値にもならないということ、を、果敢にも示そうとする<sup>9)</sup>。彼は、ここで Geach が指摘した用法の他にも、虚構に対立する意味での存在や、概念的存在など、様々なタイプの存在命題を逐一検討し、それらにおける「存在」が、一階述語論理における述語でないことを示していく。彼の最終的な目的は、哲学から「存在論」を排除することである。彼の信ずるところによれば、「存在」は、この世界の個物に属するいかなる性質でもない。したがって、「存在」は、いわばその解体業務を担当する論理学を別とすれば、哲学に限らず、およそどんな学問の対象でもあ

り得ない。「存在は、意味論ではなく、統語論の問題である」<sup>10)</sup>という彼の言葉は、やや誤解を招く表現ではあるが、彼の意気込みを、よく表現していると思われる。ともあれ、もしも、Williamsの試みが成功しているならば、Geachの主張は、間違っていることになるのである。

ところが、本論における、もう一人の登場人物である Brian Davies は、Geachとは異なった弁護を試みる。つまり彼は、先の論証の2を認めた上で、1を否定する。彼は、むしろ Williamsの存在理解に同意し、「存在する」に、一階述語論理における述語としての用法を認めることに反対する。「存在」は、あくまでも一階述語論理における存在量化が示す意味であり、決して、述語記号の値とはならない。しかし、Williamsと異なるのは、たとえこれを認めたとしても、トマス・アクィナスのエッセの思想が無意味になることはない、と主張する点である。いったいどのようにして、そのような主張が可能なのか。以下に、Daviesの議論を見ていくことにする。

### 第三章 B. Daviesの弁護

Daviesによれば、トマス・アクィナスは、「存在」という概念が含む哲学的困難を、彼なりの仕方では察していた。このことは、トマスが多くの箇所では取り上げる、エッセの意味分類に関する議論に現れている。

たとえば、『デ・エンテ』冒頭の有名な箇所では、「十の類に分かたれる」と「命題の真理を示す」ともの分類が示されている<sup>11)</sup>。「十の範疇に分かたれる」という意味のエッセ(エンス)は、個物について何かを語る文で用いられ、「命題の真理を示す」と言われるエッセ(エンス)は、個物について何かを語るように見えて、実はそうでない文で用いられる。したがって、エッセを含む文は、対象たる個物について何かを語る場合と、個物については何も語らず、何か真であることを語る場合とがある<sup>12)</sup>。トマスが、この後者の用法に注意を促すのは、エッセを含む文が個物について何かを語りうる、という主張を行う際の危険を、トマスが十分に察知していたからだ、とDaviesは考える<sup>13)</sup>。

その「危険」とは、たとえば「盲が眼にある」と言うことによって、あたかも「盲」という何らかのモノが存在するかのような、誤った印象を与えてしまうということである。この点に関する限り、トマス・アクィナスの危惧は分析哲学者たちが抱く危惧と異ならない。たとえば、先に見た Geach の例を再び用いるならば、「龍は存在しない」という命題において、「龍」は、この場合、主語ではなく述語である。つまり、この文は、論理的には「いかなるものも龍でない」という構造を持つ。こう解釈する利点の一つは、「龍」を主語と見なしたときに生じる、「存在しない龍とは何か」という問題を回避できるという点なのである。

Davies の解釈によれば、トマス・アクィナスは、「存在」という言葉が引き起こすであろうこのような混乱に対して、十分な警戒心を持っていた。だからこそ、繰り返し、エッセの用法について注意を促したのである。

では、もう一つの、「対象たる個物について何事かを語るエッセ」とは何であろうか。Davies の表現を用いれば、このエッセによってトマスが強調したかったことは、被造物が、「単なる言葉の意味以上のもの」だ、ということである<sup>14)</sup>。Davies が持ち出す例は、一角獣と猫である。一角獣のフレッドと、猫のミケについて、それぞれの「何であるか」を探求する方法は異なる。フレッドは、架空の動物なので、その何であるかを調べるために必要なのは、もっぱら書物である。一角獣のフレッドが、どのような動物であり、どのような姿をし、どのような性質を持つかは、フレッドについて書かれた文献を調べればわかる。ところが、ミケの場合、「ミケ」という猫に関する文献を調べて終わりではない。ミケはフレッドと違い、この世界の中に実在する何かである。つまり、ミケは、単なる言葉の意味ではない。ミケは、いわば「言葉の意味以上のもの」であり、たとえば自然科学的な探求に開かれた存在である。

Davies の解釈によれば、「エッセを持つ」という言葉でトマスが差別化しようとするのは、この、フレッドとミケの区別である。Davies は、この視点を保ったまま、「神はエッセそのものである」というトマスの思想に迫ろうとする。この世界は、単なる言葉の意味以上のものである。しかし、なぜこの世界



が、単なる言葉の意味以上のものであるのか。Davies は、「世界はどのようにあるか、ということが神秘的なのではない。世界がある、ということが神秘的なのである」（『論考』6.44）というヴィトゲンシュタインの言葉を引用する。「世界はなぜあるのか」、Davies の言い方をすれば、「世界はなぜ言葉の意味以上のものであるのか」、この問いを意識したとき、トマスは、「神」という言葉を用いた思考を開始する。「なぜそもそもこの世界があるのか」という問いは、トマスにとって、答えがなければならぬ真剣な問いであった。そして彼は、この問いの答えとなるものに、「神」という名を与えたのである<sup>15)</sup>。「神」は、この世界が単なる言葉の意味以上のものであること、つまり、エッセを持つことの根拠である。

トマスは、また、「神は自存するエッセそのものである」と言う。それは、世界が単なる言葉の意味以上のものであることの不思議、世界がエッセを持つこと不思議を、一手に引き受ける最終根拠が、「神」という言葉で指されていることを意味する。その限りで、神は、エッセを与えられたものではない。伝統的な言い回しでは、神は被造物ではなく、創造者である。トマスが、「神は自存するエッセそのものである」という表現で言おうとしたことは、それ故、何ら積極的なものではない。それは、根本において否定的であり、彼自身が設定した、否定の道 (via negativa) の一つの到達点なのである<sup>16)</sup>。

以上が、Davies による「エッセ」の解釈の骨組みであるが、その内容は、細部まで十分に明晰になっているとは言い難い。しかし、Davies の解釈のポイントは、対象たる個物について何事かを語るエッセを、「単なる言葉の意味以上のものである」、端的には、「虚構でない」non-fictional という意味に理解する点にある<sup>17)</sup>。そして、注意すべき点は、Davies が、このエッセを、「存在する」という意味ではない、と考える点である。したがって、「存在する」という意味のエッセは、先の『デ・エンテ』のテキストの二番目のもの、つまり、Davies によれば「対象たる個物について何かを語るように見えて、そうでない」文で用いられるエッセに限られることになる。

したがって、「存在」に述語としての用法を認めることによって、トマスの

エッセの思想を救おうとする Geach に対して、Davies は、エッセの中に、「存在」とは異なる意味を持ち込むことによって、同じ目的を果たそうとしている、と言える。

#### 第四章 エッセとは何か

Davies の解釈をまとめるならば、次のようになるだろう。トマス・アクィナスのエッセには、二つの意味がある。一つは、一階述語論理の存在量化につながる、述語でないエッセ、これが、「存在」と訳しうるエッセの用法である。そしてもう一つは、「虚構でない」という意味でのエッセである。後者のエッセは、一階述語論理で「述語」として扱われる。しかし、それは、「存在」の意味に含まれているのではない。この「虚構でない」という意味において、「神は自存するエッセそのものである」とか「被造物は神からエッセを受けて存在する」という命題が理解可能となる。

Davies のこの解釈の利点は、「存在する」の意味を、存在量化の意味に固定できる点である。この点で、「存在する」の意味に、存在量化に加えて、「生きている」のような述語としての意味も認めようとする Geach の解釈よりも、すっきりした解釈と言える。

しかし、この Geach と Davies のどちらが正しいか、という問いに、ここでこれ以上立ち入った判断を下すことは差し控えたい。それには、現代の分析的存在論と、トマス・アクィナスの形而上学に関する、より十全な準備が必要であろう。以下、本論を閉じるにあたり、一つの試論として、この問題への新しい視点を提示してみたい。

Davies が示した『デ・エンテ』のテキストには、多くの平行箇所がある<sup>18)</sup>。その中で、私が特に注目したいのは、次の箇所である。

エッセは三つの意味で語られることを知るべきである。一つには、事物の「何性」あるいは「本性」がエッセと言われる。ちょうど、「定義とは、エッセが何であることを示す言説である」と言われる場合のように、つまり、

定義は、事物の「何性」を示すのである。もう一つには、エッセンチアの現実態がエッセと言われる。ちょうど、「生きるもの」にとってのエッセである「生きること」が、魂の現実態であるように。しかしそれは、第二現実態（つまり働き）ではなく、第一現実態である。第三には、命題における複合の真理を表示するものがエッセと言われ、その限りで、「ある」は繫辞と言われる。そして、この意味におけるエッセは、それ自身の完成に関しては、複合、分割する知性においてあるが、事物のエッセに基礎を持つ。事物のエッセとは、エッセンチアの現実態のことである。（『命題集注解』第1巻第33区分第1問第1項第1異論解答）<sup>19)</sup>

このテキストの特徴は、通常二つに分類されるエッセの意味が、より詳しく、三つに分類されている点である。これを、より踏み込んだ記述と見るか、あるいは、初期の未成熟で混乱した記述と見るか、解釈が異なるところであろう。しかし今は、このテキストの、トマス・アクィナス全体における位置づけには立ち入らず、このテキストをもとに、現在の課題に関して、何が言えるかを考えてみたい<sup>20)</sup>。

この三つの分類を、一階述語論理における「存在」と「述語」という視点から眺めた時に、何が言えるだろうか。まず、第一のエッセは、「定義とはエッセの何であるかを示す」のように用いられ、事物の何性や本性を意味する。したがって、これを、一階述語論理の中から見ると、個物たる対象について何事かを語る述語 P, Q, R ... を一括して示す図式文字を  $\Phi$  としたときの、この  $\Phi$  に相当することになる。これは、「～のエッセ」と特定されることによって、具体的な述語を指すようになる。

これは、Geach が言う、「述語としての存在」ではない。Geach は、「もはやいない」や、「生きている」という文脈で用いられる「存在」が、純粋な述語であると主張するが、それは、今述べた、P, Q, R, ... などを一括して示す図式  $\Phi$  としてのエッセではなく、それらの述語記号の一つ（たとえば「生きている」に相当する述語）を、エッセの意味として割り当てようという提案で

ある。しかし、少なくとも、この第一の意味に関する限り、Geach の提案を受け入れる必要性はない。エッセンチア（つまり「何かである」ということ）を持つか持たないか、という区別は、生きているか、もう死んでしまったかという区別とは、次元を異にするだろうからである。

ともかく、この、第一の意味のエッセは、エッセンチアと同義である限りにおいて、一階述語論理から見れば、紛れもない述語である。したがって、エッセのこの意味に関する限り、「述語でないものを述語として使っている」という批判に対して、「述語を述語として使っている」と反論できる。

次に、エッセの第三の意味について、先に検討しておこう。「命題における複合の真理」を示す、と言われるこのエッセは、Davies によれば、「対象たる個物について何かを語るのではなく、何か真であることを語る」エッセである。これに気付いている限りで、トマス・アクィナスは、「存在は述語でない」という一階述語論理の存在理解に同意するとさえ言えるであろう。実際、トマス・アクィナスは、「存在」のこの用法に、一貫して、読者に注意を促している。「悪」や「盲目」、あるいは「欠如」や「否定」などは、それ自体としてエッセンチアを持たない。にもかかわらず、知性の働きによって、「悪が存在する」というような命題が形成されることがある。トマスは、このような命題も正しい命題であり、真偽いずれかの値を取ると考える。たとえば「悪が存在する」という命題は、「悪」がエッセンチアを持たないと定義されている以上、「悪」という個体に関して、何らかの情報を与えるものではない。そうではなくて、この命題が意味するのは、「何かが悪い」ということである。これは、「議論領域に属する少なくとも一つの個体が、悪いという属性を持つ」、あるいは、よりトマス的には、「議論領域に属する少なくとも一つの個体が、しかるべき善を欠いている」というように、一階述語論理の意味論の中にぴったりと収まることは確かである。

しかし、このことから、トマス・アクィナスが、エッセの意味に関して、存在量化のアイデアにいくらかなりとも近づいていた、と考えるのは、誤りであろう。なぜなら、たまたま正しいことを言うことと、それを取り出して、理論

的に整備することとは違うからである。トマスは、確かに、述語でないエッセの用例に気付いていた。さらに、「Pが存在する」という命題が、実は、「少なくとも一つのものがPである」という意味に他ならないことまでも見抜いていた。しかしこのことから、トマスの中に Frege の先駆を見ると言うならば、それは過大評価である。

ただし、「述語でないものを述語として扱っていた」という、分析的トミストの批判に対してのみ言うならば、トマス・アキナスが、述語でない存在の用例に関して、十分に意識的であった、というこの一点を、強調しておく必要がある。彼らが考えるほど、トマス・アキナスは、「存在に関する前フレーゲの誤謬」に毒されていたわけではない。エッセの第三の意味に注意を向けることによって、トマスは、述語でないものを、正しく、述語でないものとして扱ったのである。

さて、おそらく、もっとも困難で、重要な問題を孕んでいるのは、エッセの第二の意味、つまり、「エッセンチアの現実態」であるだろう。「エッセンチアの現実態」という表現は、複合語である。つまりこれは、「エッセンチア」と「現実態」という、二つの言葉からできている。すでに見たように、エッセンチアは、一階述語論理の視点から見れば、述語であり、これは、エッセの第一の意味と変わらない。問題は、「現実態」である。この概念を含むために、エッセの第二の意味は、第一の意味から区別される。そして、その限りにおいて、この第二の意味におけるエッセこそが、いわゆる、「エッセの思想」を形成する中心概念となる。なぜなら、この意味で考えられたときにのみ、神のエッセは神のエッセンチアと同一であるとか、被造物のエッセはそのエッセンチアと異なる、というようなことが、意味をなしうるからである。

「現実態」という概念を形式化し、論理学の内部に位置づけ、十分に分析することは、それ自体として興味深い課題だが、本論でそれを行うことはできない。ここでは、現在の課題の範囲で、必要最小限の確認に止める。

第一に確認したいことは、「現実態」が、少なくとも一階述語論理における単純な述語ではない、ということである。もしそうならば、それは、一種のエ

ッセンチアであろう。しかし、「現実態」は、「エッセンチアの現実態」という表現から分かるように、エッセンチアの一つではなく、エッセンチア全体を一括して性格づけることができるような、エッセンチアとは異なる次元の概念である。したがって、それは、一階述語論理で言う単純な述語ではない。では何か。述語記号以外で、一階述語論理に含まれる主なものは、項（個体定項、個体変項）と論理定項（結合子と量量子）であろう。しかし、このどれにも、「現実態」という概念が適合するとは思えない。したがって、「現実態」という概念は、通常の一階述語論理の枠組みから、はみ出ている可能性がある<sup>21)</sup>。

それ故、一階述語論理の中で、無理に「エッセンチアの現実態」を扱おうとすれば、それは、エッセンチアと同じものとして扱わざるを得ないであろう。しかし、トマス・アキナスのエッセの思想は、そこに違いを見ること、つまり「エッセンチア」と「エッセンチアの現実態」の間に違いを見ることにおいて成り立っている。なぜなら、繰り返すが、もし、エッセがエッセンチアを意味するに過ぎなければ、エッセとエッセンチアの実在的区別とか、神における両者の一致というトマスの思想は、意味をなさなくなるからである。

神のエッセンチアはエッセと同一である、とトマスが言うとき、その意味は、「神のエッセンチアは、神の数がゼロでない、ということだ」という意味ではなく、神のエッセンチアは、エッセンチアの現実態だ、という意味である。エッセンチアの現実態がエッセンチアであるもの、つまりその本質が本質的に現実態であるものとは、トマスの言葉で言えば、それが純粹現実態 (actus purus) にあることを意味する。この神学的な意味はさておき、本論におけるポイントは、それは、一階述語論理の枠組みをはみ出しており、したがって、一階述語論理における「存在」ではない、という点である。

## 結 び

現在、トマス・アキナスの形而上学を研究することに、どれほどの哲学的意義があるか。これが、本論の始まりにあった疑問である。具体的事例として、彼のエッセの思想をめぐる批判と弁護を概観した今、この問いにどう答えるこ

とができるだろうか。

この問いが問うている事柄を正確に理解するためには、次の問いとの違いに注意するとよい。「現在、分析哲学を研究することは、トマス・アクィナスの形而上学研究に、どれほどの哲学的意義があるか」。その意義を大とし、積極的に、分析哲学の手法をトマス研究に導入したのが、分析的トミズムであった。とすれば、我々の問題意識は、分析的トミズムとは逆の方向にあると言える。つまり、トマス研究の観点を、分析的哲学に導入するメリットはあるか、ということを考えているのである。

本論では、エッセの思想を分析するために、一階述語論理という、分析哲学の手法を導入した。ここまでは、分析的トミズムの議論である。しかし、最後に、トマスの分析の中に、一階述語論理では扱えない概念がある可能性を指摘した。「現実態」という概念がそれである。この場合、一階述語論理が扱われないような概念は理解不可能だと切り捨てる方法もあるだろうし、現に Kenny にその傾向を見ることができる。しかし、このように、思想史的遺産を切り捨てていく方向は、分析哲学に幸福な結果をもたらすとは思えない。むしろ、そこに、一階述語論理の限界を見、さらに拡張された形式的体系を模索する方向へ向かった方が、分析哲学としてもより豊かな結果を得ることができるだろう。この、後者の道を切り開こうとする者に対して、トマス・アクィナスの形而上学は、豊かな示唆と刺激を与えることができるのではないだろうか。

#### 注

- 1) Anthony Kenny, *Aquinas* (Oxford : Oxford University Press, 1980) : 60.
- 2) C.J.F. Williams, "Being" in *A Companion to Philosophy of Religion*, eds. Quinn and Taliaferro (Cambridge/Oxford : Blackwell, 1997) : 223-28.
- 3) 述語記号の値については、「モデル」という考えに基づいて、より正確な定義が与えられるが、ここでは、できるだけ多くの人と議論を共有するための必要最小限の補足という意図から、詳細は省略する。
- 4) 「存在するとは束縛変項の値となることである」(To be is to be the value of a variable.) という Quine の有名な言葉は、この簡潔な表現である。
- 5) ここでの Geach の議論は、以下の論文による。Peter Geach, "Form and Exis-

- tence,” in *Aquinas : A Collection of Critical Essays*, ed. Anthony Kenny (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1976) : 29-53.
- 6) Now it is this sense of ‘is’ or ‘exists’, the one found in C propositions, that is relevant to Aquinas’ term *esse*. This interpretation, I maintain, alone makes coherent sense of all that Aquinas says about *esse*. (ibid., 47)
- 7) 『創世記』42章36節。
- 8) C.J.F. Williams, *What is Existence ?* (Oxford : Oxford University Press, 1981).
- 9) Williams や、彼の周辺では、「一階の述語」「二階の述語」という用語を用い、前者を一階述語論理で言う述語、後者を、Frege の言う「第二階の概念」と解する。(『フレーゲ著作集2』勁草書房、2001年、112-13頁参照。) 本論では、この意味での一階の述語を、単に「述語」または「一階述語論理における述語」と呼び、「二階の述語」という用語は用いないことにする。なお、「一階の述語」「二階の述語」という表現が、数学者、論理学者に無用の誤解を与える、という点は、岩熊幸夫(福井県立大学)、田中裕(上智大学)両氏のご指摘に依る。
- 10) The problems of existence are, whatever Existentialists may say, problems whose solutions are provided by logic. The explanation of the meaning of ‘exist’ and ‘be’ is not even a matter of semantics : it is a matter of syntax. (Williams, *What is Existence ?*) : x.
- 11) Sciendum est igitur quod, sicut in V Metaphysice Philosophus dicit, ens per se dupliciter dicitur : uno modo quod diuiditur per decem genera, alio modo quod significat propositionum ueritatem. Horum autem differentia est quia secundo modo potest dici ens omne illud de quo affirmatiua propositio formari potest, etiam si illud in re nichil ponat ; per quem modum priuationes et negationes entia dicuntur : dicimus enim quod affirmatio est opposita negationi, et quod cecitas est in oculo. Sed primo modo non potest dici ens nisi quod aliquid in re ponit ; unde primo modo cecitas et huiusmodi non sunt entia. (*De Ente et Essentia*, c.1, ll. 1-13.)
- 12) On his account, existence statements can tell us something about an individual (e.g., “Pope John Paul II is pious”), or they can tell us something true without telling us something about any individual (as in “Blindness exists,” which is true not because there is something which can be called “blindness” but because some people and animals cannot see.) (Brian Davies, O.P., “Aquinas, God, and Being,” *The Monist*, vol. 80, no. 4, 1997) : 510.
- 13) In short, Aquinas is perfectly alert to the dangers of saying that “... exist(s)” can serve to tell us anything about any object or individual. (ibid., 512)
- 14) And the point we need most especially to note is that creatures, for Aquinas, are more than the meanings of words. (ibid., 513)



- 15) For him, the question “How come any universe?” is a serious one to which there must be an answer. And he gives the name “God” to whatever the answer is. (ibid., 515)
- 16) この Davies の、ある意味で挑戦的な解釈に対する、保守的トミストのストレートな反応としては、次の論文を参照。Brian J. Shanley, O.P., “Analytical Thomism,” *The Thomist* 63 (1999) : 125-137. しかしその内容は、Davies に対する理論上の反論と言うよりも、嫌悪感の表出に過ぎない。
- 17) Davies の筆者宛私信による。
- 18) エッセの意味分析が行われている箇所を、以下に列挙する。 *De Ente et Essentia*, c. 1, l.2 ; *In I Sent.* d.19, q.5, a.1, ad 1 ; *In I Sent.* d.33, q.1, a.1, ad 1 ; *In II Sent.* d.34, q.1, a.1, c. ; *In II Sent.* d.37, q.1, a.2, ad 3 ; *In III Sent.* d.6, q.2, a.2, c. ; *De Veritate* q.1, a.1, ad 1 ; *Quaestiones Quodlibetales* IX q.2, a.2, c. ; *Summa Theologiae* I, q.3, a. 4, ad 2 ; *Summa Theologiae* I, q.48, a.2, ad 2 ; *De Malo* q.1, a.1 ad 19 ; *In V Met.* l.9, nn.889-896 ; *In X Met.* l.3, n.1982 ; *Quaestiones Quodlibetales* II, q.2, a.1, c.
- 19) Sed sciendum, quod esse dicitur tripliciter. Uno modo dicitur esse ipsa quidditas vel natura rei, sicut quod definitio est oratio significans quid est esse ; definitio enim quidditatem rei significat. Alio modo dicitur esse ipse actus essentiae ; sicut vivere, quod est esse viventibus, est animae actus ; non actus secundus, qui est operatio, sed actus primus. Tertio modo dicitur esse quod significat veritatem compositionis in propositionibus, secundum quod ‘est’ dicitur copula : et secundum hoc est in intellectu componente et dividente quantum ad sui complementum, sed fundatur in esse rei, quod est actus essentiae, ... (*In I Sent.* d.33, q.1, a.1, ad 1)
- 20) 注18)のテキストに基づいた、エッセの意味分類に関する考察の詳細は、次の拙論を参照。上枝美典「トマス・アクィナスの存在論研究——「エッセの現実態」としてのエッセ」(『福岡大学人文論叢』第30巻第1号, 1998年6月20日) 1-47頁。
- 21) もちろん、ここでの議論は、「現実態」を一階述語論理の中で扱う可能性を排除するには極めて不十分である。ある種の複合的な述語として、「現実態」を分析しうる可能性は、十分に開かれている。しかし、その場合にも、議論領域の拡張や、時制の導入など、標準的な一階述語論理に対する何らかの拡張が必要になってくると思われる。付言すれば、今後、「現実態」や「現実性」といった概念の分析に関して、もっとも注目すべきは、一階述語論理の拡張である、様相述語論理であろう。